

務課のほうからはできるだけ共同歩調をとってほしいと要望もあり、ある程度の共同歩調の上に各校の独自性が出ているといった形になっている。校舎自体バラエティに富んでいて他所のいいところばかり眼について仕方がない状態で、中に入る設備については初年度は画一的だったが今年度からは各校でかなりの独自性がでている。

〔既設校と新設校〕はつきりいつて既設校はげんなりして、新設校には顔まけだという調子だといってよかろう。しかし既設校もそれ自体の実習設備をよくし、実習計画も改善して行きたいというように考えていると思う。ただ新設校というものは前より見ながらいい気になって歩いているともいえる。既設校と新設校の間に将来大きな一線を劃されてしまうというようなことが起るかどうかという問題ですが現状ではそういうことがおこるとはちょっと考えられない。既設校の中から新設校へ各科の中心的スタッフが動いてきたため、両者の隔差ということは教員の意識の面とか質の面でも起っていないといえる。

Ⅲ 学習指導

新設校の教育課程はたしか一校を除いて工業科目が比較的多い。私は工業科目が少し多いのではないかと思う。現在のカリキュラムはあらかじめ任せられた校長の意図があらわれていると見てよい。前にのべたように機械科・電気科学各科がかなり独立的に仕事をすすめてきているのであるが、普通科の先生もはじめて工高へきたというので、工業高校ではそれぞれの科でどんなことをやっているのだろうと関心が深く、工業教育の中へ普通教育をどういふふうに入れていったらよいか。AかBか、A B混合でゆか、忙しいなかでも割合に意見を出し合おうという姿勢でいる。

まだ建設中で製図室がない学校もあり、製図机が入っていても、おちついてどう授業をやっているかとなるとちょっと首をかしげな

ければならない面もある。教師自身教育以外の仕事に追われ雑務中心なのか教科中心なのかわからない状態では無理もない。それでも幸いなことに建設要員ということで特別に定員が配当されていて（例えば機械科4クラスで機械科教員6名、1年の工業科目は実習、応力、製図、工作）週持時間が平均8時間である。一番困るのは実習で、一番早い学校で10月末から実習がやれる状態になるのであるが、それまでは実習という科目があっても、計算尺をやったり、ノギス、マイクロで測定をやらせたり、映画やスライドでお茶をにごしている。（文責H）

技 術 と 認 識

佐々木 享

1

大きな題だが、じつはこれは昨（62）年の11月と12月に『教育評論』に書いた小論のタイトルである。じつは、この論文は、私が技術の方を、原氏が手労働と技術学習の方をそれぞれ分担するはずであったところ原氏はそれより少し前に同じ趣旨のものを『生活教育』（62年9月号）に発表されたばかりだったので遠慮されたために、私が大それたものを書くはめになったのである。書いてしまったあとになって、あんまり背のびをしない方がよかったと反省しているところだが、岩手の「技術教育を語る会」の会報では、大へん好意的にこの小論を要約紹介した（同会報637）うえで、批判的検討もして下さったので（同会報639）、その後気をついたことについて、若干の補足をしておきたい。

2

前述の論稿で私のいいかかったことの要点は、編集部から与えられたテーマにかなり忠実に、①常識的な概念は別として「技術」ということは科学者のあいだでは異論の多い問題だから不用意な議論はしない方がよいので

はないかということ、②科学者のどの考え方からみるにしても、「学習指導要領」における「技術」は不明瞭であるのみでなく混乱を極めていること、③それにもかかわらず「基礎的技術とは何か」などという問題を文部教研のテーマにして、これらの混乱を技術科教師におしつけようとしていること、④技術科で教えることは（全部ではないにしても）かなりの部分が、実在の技術のあれこれではなく、技術学によって系統的に組織された知識であること、従来この面が軽視され、研究も不充分であることなどである。

ここまでのところなら、今でもあまり問題ないことだと思っているが、技術科も教科であるからには、科学の基本を教授することが第一義的に重要であるという趣旨のことを書いたことには問題があったと反省している。

（『教育』46159、P61参照）私はこの当時、ダニロフ・イェシポフの『教授学』

（明治図書版）を読んでいたもので、この中にある「科学の基本を、厳密に論理的に順序をふんで教授し、生徒たちの学習労働を順次的に指導し、かれらによる知識・能力・習熟の体系を習得」（同上書P256）させることが、教授学上の重要なテーゼであることは常識だと思っていたのである。この点に、私の前掲論稿の第一の誤りと甘さがあった。

この「教授の科学性」と呼ばれる教授学原理の重要性は、矢川徳光氏によれば（『ソビエト教育学入門』P167～172）、1930年代以来の諸論争のなかで検討され、書物としては前掲のダニロフ・イェシポフがとりあげたのがはじめてだという。こうした事情を考慮してみると、私が、科学を教えることをあたかも巻間の常識であるかの如くのべたことは軽卒のそしりをまぬかれない。わが国で、とりわけ技術科教育で、「教授の科学性の原理」を確立し論証するためには、それなりの緻密な論証を拡げるための運動とが必要であることを痛感している。

3

前掲の拙稿では、以上のほか「認識」ということばにこだわったため、技術科教育における認識に関連して実践の意義というようなことに言及した。日頃深く研究したことのない問題だったので、毛沢東の『実践論』を手がかりにして、子どもの認識過程における「実践」の重要性についてのべたのである。

この問題については、その後も研究を重ねてきたわけではないから、今でもまとまった意見をのべることはできない。ただ、毛沢東の『実践論』は主として政治活動に焦点をあわせてのべているのだから、これを教授過程での認識の問題に機械的に適用するのは、あやまりだということに気づいた。いわば心理学に属するこの問題については、意見をきいてみたいところである。

4

話題が少し横道にそれるが、最近、池上正道氏が、「労働と教育の結合」という原則を不用意に技術科にもち込むことは危険だという筆者の見解に批判的な意見を出された（『ソビエト教育学』4611、P38）。私は、子どもがまともな人間として育つために正しい労働教育を受けることは絶対に必要だと考えているが、このことと技術科で行われる作業とは一おう別に考えた方がよいと思っているのであって、労働と教育の結合の原則を否定しているわけではない。むしろだいにしなければならぬと考えていることを明らかにしておきたい。詳しくは別の機会に私の意見をのべたいと思っている。